

わが国において循環器疾患は悪性新生物（腫瘍）に次ぐ死因であり、2019年人口動態統計によると、7人に1人が心疾患（高血圧性を除く）により死亡しています。この割合は約20年前の1998年のそれとほぼ同じですが、死亡数と死亡率ともに増加しています。

このような現状を鑑み、2018年に「健康寿命の延伸等を図るための脳卒中、心臓病その他の循環器病に係る対策に関する基本法（脳卒中・循環器病対策基本法）」が制定、2019年に施行されました。同法の基本理念の一つに、「循環器病を発症した疑いがある者の搬送および医療機関による受入れの迅速かつ適切な実施、循環器病患者に対する良質かつ適切なリハビリテーションを含む医療」が挙げられ、今後の循環器診療における重要性を物語っています。

超高齢社会に突入したわが国では、総人口に占める65歳以上の高齢者の割合が2020年推計において28.7%（3,617万人）と、過去最高となっています。同時に、高齢者人口の割合は201の国と地域において世界最高です。国内では、激増する心不全をはじめとする循環器疾患の患者への対応に迫られています。

このため、循環器専門医のみではなく多くの一般内科医が心不全そのものに対する理解に加え、その基礎疾患である虚血性心疾患、心筋症、弁膜症、不整脈、先天性心疾患などに対するトータルな理解が必要な時代になりつつあります。一方、医療の進歩に伴い、医師は診療科目の専門性を高めていくことが一般的です。

しかし、実際の臨床現場では、一つの専門分野からの視点のみでは対応が十分でないことが多々あります。例えば、循環器疾患患者の診療に際し、慢性腎臓病や脳血管疾患の併存がしばしば認められます。逆に、循環器専門医は、腎臓内科や脳卒中内科の先生方から、併存する循環器疾患についてコンサルトを受けることが度々あります。いわゆる「心・腎・脳連関」であり、患者を疾患別に診るのではなく、まさしく「一人の患者としてトータルで診ること」が求められています。

これらのニーズに応える実践書として、『コンプリートシリーズ』を発刊する運びとなりました。このシリーズには、大きな特徴が二つあります。

一つ目は、本シリーズは、『心不全』、『心筋症』、『不整脈』、『先天性心疾患・肺動脈疾患』、『弁膜症』、『虚血性心疾患』より構成されており、若手の循環器内科医や循環器疾患の診療に携わる医師にとって必要な最新の知識が「網羅」されていることです。

二つ目は、心腎脳連関の観点から腎臓専門医、脳卒中専門医からのアドバイスが全項目の随所にあり、臨床現場のやりとりを紙面上でvividに再現しています。この点は他書に類を認められず、診療科をつなげ、まさしく「一人の患者としてトータルで診ること」に役立つ、新しいコンセプトの実践書であると自負しております。

本シリーズが臨床の最前線で活躍されている若手循環器内科医をはじめ、循環器疾患の診療に携わる内科医、研修医にとって最新の実践書となることができれば、シリーズ総編集・編集委員・執筆者にとって望外の喜びとするところです。

2021年3月

編集委員を代表して
南野哲男

序文

循環器診療コンプリートシリーズの第4巻として、『先天性心疾患・肺動脈疾患』をお届けします。本シリーズではこれまでの医学教科書のイメージを打ち破り、多くの図表を用いてビジュアルに訴える紙面となっています。

本書『先天性心疾患・肺動脈疾患』では全ての領域でオリジナルな画像やイラストを掲載し、皆様にお届けすることになりました。実際の心疾患像を2次元のイラストとして表現するには色々な制約があり、一部は簡素化した部分もあります。ただその分、先天性心疾患、特に成人先天性心疾患の概念を理解するには明確なイラストになったと考えています。

本書は研修医、若手の循環器内科医をはじめ、さらにこれから成人先天性心疾患診療に携わる医師のために、実際の日常診療で遭遇する可能性の高い先天性心疾患・肺動脈疾患を中心に構成しました。疾患概念を一読して理解できるように、各項目で「診療のエッセンス」を箇条書きにしました。時間が限られる場合には、この「診療のエッセンス」と図表を眺めていただければ疾患の概念は短時間で理解できると思います。

成人に達した先天性心疾患患者は、既に国内で50万人を超える状況となっています。これまで成人先天性心疾患は心房中隔欠損症のような左右短絡疾患を中心とした比較的単純心疾患が多かったのですが、これからはFallot四徴症や単心室のようなチアノーゼ心疾患を中心とした複雑心疾患の割合が増えていきます。先天性心疾患は疾患の多様性に加え、それぞれの心疾患に対する外科手術法の違いによって成人期には異なった病態を呈してきます。Fontan手術のように同じ手術名であっても、時代によって異なる手術方法がとられ、それぞれ違った術後遠隔期の問題点が存在する手術法もあります。

このような循環器内科ではこれまで経験してこなかった複雑心疾患を、循環器内科医が主体となって管理や治療を行わないといけない時代となってきます。このような患者の診療に、本書が役立つことがあれば嬉しく思います。

最後に、本書のイラスト作成に取り組んでいただいた吉安俊英さんや谷口陽一さんをはじめとする株式会社学研メディカル秀潤社の方々に御礼申し上げます。

2021年9月

岡山大学成人先天性心疾患センター センター長
赤木禎治